

教育研究所だより

守山市教育研究所発行

平成30年3月20日 No.208 所長 西川 典子

守山市勝部三丁目9番1号 (守山市生涯学習・教育支援センター 愛称:エルセンター3・4階)

E-mail kyoikukenkyu@city.moriyama.lg.jp TEL 077-583-4217 Fax 077-583-4237

H P http://www2.city.moriyama.lg.jp/moriyama-kyoikukenkyu/



「思春期のゆらぎと支援」 —子どもの願いと大人の役割—

立命館大学大学院教職研究科長 春日井 敏之 氏

—教育研究発表大会 教育講演 ダイジェスト版— H30.2.7 守山市民ホール 小ホール

教師がひとりの人間として「あなたと出会ったことは、僕にとって、こういう意味があったよ」と語ることが大切だ。

(教育講演より)

●「察する力」と自己決定

子どもは不安や葛藤を抱きながら、周囲とつながることによって、できる範囲で主体的に生きようとしている。子どもの心は見えないものであり、教師や保護者の「察する力」が求められている。また、大人から見た価値判断や押しつけでなく、子どもの小さな自己決定を重ねるプロセスが大切である。自己決定の支援には二つの意味がある。一つ目は、自己決定までのプロセスを応援すること、二つ目は、自己決定した結果の成否にかかわらず応援し続けることである。この二つの意味をもった支援によって、自分という人間の幹ができる。

●ガソリンの切れた子どもに「走れ!」と言っていますか?

保護者や教師はサブエンジンであり、大切なことは、子どもが自分のメインエンジンに自分の手でスイッチを入れることができるかである。失敗や挫折、葛藤をしたときに、周りがどのように支援してくれたかが大事であり、その体験は人生を支え、生きる力になる。人生80年、青年期の1~2年間、少し立ち止まったり、回り道をしたりする。そのことには大事な意味がある。

●「人間」との関係、「自然」との関係、「文化」との関係

子どもは人間関係だけではなく、「自然」との関係や「文化」との関係の中で育っていく。夕日や木々との語りや、読書や音楽をとおして「自然」や「文化」と向き合うことによって自分を見つめ直し、不登校から回復の兆しが見える場合がある。「自然」や「文化」とのかかわりは、自分と向き合うきっかけになるからである。

●教師や親が指導するうえで大切な「守りの枠」

当たり前前の日常生活の心地よさが学校にあることが大切であり、そのためにルールが存在する。ルールが「子どもの命」、「子どもの権利」、「子どもの利益」を守る枠になっているのか検証し、ルールを守ることを子どもたちに言いきることも大切。これらを踏まえないと管理主義教育、体罰問題、虐待問題が生じる。

●自己肯定感を育てることがゴールではない

自己肯定感が高いか低いかで競争になってしまっていないか。優劣の評価ではなく「みんなが、かけがえない存在である」とお互いを尊重することが本当の個性尊重であり、子どもの発達段階に応じて、それをどう伝えていくかが大切である。自己肯定感とは、こうした取り組みの中で気が付いたら身につけているものである。

●「聴く」と「問う」ことの意味

「聴く」ということは、まず感情を受けとめるということ。一緒に悩みながら考えることや、一緒にいること(寄り添うこと)が聴くことになる場合もある。時には一緒に涙を流すことで「つらいねん」という負の感情を共有することもある。本当にしんどい時は言語化できないものである。お互いに分かり合おうという努力をあきらめないことが、最も重要なことである。教師や保護者は解決請負人になるのではなく、一緒に時間を過ごし、一緒に考えるプロセスをもつことである。「聴く」ことの次に大切なことは、子どもの言動の意味を「問う」ことである。なぜこの子は荒れているのか、学校に来づらいのか、攻撃的なのか。一人でわからないときには、同僚などと「子どもの言動の意味を問う」というネットワーク支援の姿勢をもつことである。

●思春期の子どもにとって本質的な問いとは?

「10年先どんな仕事に就きたいか?」ではなく、「10年後どんな人間になりたいか?」という問いかけが大切。そこから仕事の選択の幅も広がる。また、「何のために生きているのか?」とか「あなたが大事にしていることは何?」など、今大切にしていることを教師や保護者が応援していくことが大切である。

アンケートから

- ・子どもの行事などの取り組みに際して、「結果にこだわりつつ、出た結果にこだわらない」という言葉がとても印象的だった。
- ・失敗できる安心感、「助けて」と言える安堵感が大事なことであることがわかった。「みんなが大事、あなたが大事」ということを伝えていきたい。
- ・すぐ感激しながら聞いていた。子ども主体で子どもと向き合うということの本質を教えていただいた。
- ・ひとりの人間として人との関係について大変勉強になった。まずは、自分自身と向き合い、丁寧に子どもとかわかっていきたい。

研究発表報告

教育に関わる調査研究

国語科 子どもが書きたくなる「書くこと」の学習指導について
～「これなら書ける!」という実感をもたらす単元構想の工夫～

書くことに関する意識調査を基に、子どもたちの「書くこと」への苦手意識、困り感を解消する具体的な学習指導のあり方を追究してきました。成果は次の3点です。

実践事例 1 小学6年生「絵画コメンテーターになって名画の解説文を書こう」

実践事例 2 中学2年生「お世話になった方へ科持ちを込めてお礼の手紙を書こう」

【成果①】子どもが書きたくなる、書く必然がある課題設定をすれば、「書ける！」

- ・現実の外部組織(近代美術館の学芸員＝博士)からの依頼、自分で絵を選んで書くという設定(小)
- ・実際に書いて届ける、自分がお世話になった職場体験の事業所へのお礼状(中)

【成果②】見通しがあり、ねらいが明確な学習過程を用意すれば、「書ける！」

- ・教科書教材で習得したことを、自分の解説文に活用していくABワンセット方式の学習過程(小)
- ・学習の流れを見通し、自分の取組状況を意識しながら学習を進める「学習の手引き」の活用(中)

【成果③】一人では解決できないことも相談できる目的な交流の場があれば、「書ける！」

- ・同じ絵のグループで互いの取材メモを読み合い、気付いたことや考えたことを伝え合う(小)
- ・小グループで互いの下書きを読み合い、添削し合い、アドバイスし合う推敲の場(中)

どちらの実践においても、子どもらが何のために(目的)、どのようにして(方法)書くのかを明確に意識して書く姿が見られました(詳細は平成29年度教育研究所紀要参照)。

次年度は、年間を通した「書くこと」の単元相互のつながりや学年間の系統性を研究していきたいと考えています。

指導力向上に関する研究1

算数・数学科におけるアクティブ・ラーニングやICTを活用した授業の実践(2年次)

新学習指導要領の施行まであと数年となり、アクティブ・ラーニングの普及のために、昨年度の研究で立てた授業展開モデルによる授業実践をすすめました。

しかし、実践をすすめるうちに、モデルに従うことは有効であるが、そのことにこだわりすぎると、学習内容や児童生徒の実態と合わなくなる点が生じてしまう恐れがあるため、授業展開モデルは基本としながらも、学習内容や児童生徒の実態によって、臨機応変に展開を考えていく必要があることが分かりました。

また、これからの予測困難な社会で生きていく児童生徒が習得した知識・技能を生きて働かせていくためには、学習内容と日常生活との関連づけが必要であり、単に学習内容を教えるだけではなく、児童生徒が学びたくなるような魅力のある課題の設定ができるように、教師が身近なデータを収集して教材化していくことや、授業実践を積み重ねながら、授業力を向上させていくことが重要であることが分かりました。

指導力向上に関する研究2

ICTを効果的に活用した授業の普及のための実践研究
～子どもも教員も、みんなが使えるICT環境の構築と活用～

教育でのICT環境の整備をすすめていく状況の中で、簡単なことからでも、すでに学校にあるICT機器をどんどん使っていくことが大事です。研究協力員の中には、タブレット等をあまり使ったことがない教員も数人いましたが、できることから活用の方法を考えながら実践をすすめていくと、児童生徒が授業でタブレットを使えるまでに指導できるようになりました。苦手だからと敬遠するのではなく、課題の提示等に大型提示装置の利用からはじめること、ICT研修講座等の研修を受講すること、先進的にすすめている教員の実践を参考にすることなど、教師のICT活用の資質を少しずつでも向上をさせていく必要があると感じました。しかし、ただ使えばいいというものではなく、活用することにより、どのような効果があるかの認識も必要です。現状を把握し、アナログとデジタルのよさをそれぞれよく考えながら、使い分けていくことが大切です。